

# 「なぜ」から始まる地域プロジェクト。7回ものワークショップを開催した根羽村の取り組み

## ー第一回寺子屋ローカルSDGs開催レポートー

[地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業](#)では、地域循環共生圏づくりを通して地域を元気にしたいと考える地域や企業が、ともに学び、繋がり合う場として「寺子屋ローカルSDGs」というコミュニティをつくっています。

第1回は、昨年度まで同事業に活動団体として選定されていた根羽村の杉山さんをお招きし、『準備で8割決まる、地域で効果的に事業を進めるためのプロジェクトデザイン』をテーマに勉強会を開催しました。

その内容をレポートします。

### 杉山 泰彦（すぎやま やすひこ）さんプロフィール

株式会社WHERE（根羽村所長） / 一般社団法人 ねばのもり 代表理事

2014年株式会社CRAZYに入社し、組織づくり・イベント企画・マーケティングを担当。2017年より、地方と都会の繋がりを支援する株式会社WHEREに参画。「地域から新しいライフスタイルの選択肢を見つける」をモットーに、地域PR・移住定住サポート事業で20地域の案件実施を担当。「自分自身が、もっと生きる力を身に付けたい」と考え、2018年12月より東京から長野県根羽村に夫婦で移住。村民として村社会や村民としての生き方を肌で学びながら、2019年4月より「根羽村PR戦略担当」として総合戦略を構築し、実行中。

## 5つの質問でわかる、地域プロジェクトのフェーズ

杉山：今日は、これから皆さんが地域循環共生圏の構想づくりを始める上で、効果的な準備の進め方を、体験談を踏まえお伝えします。

ビジネスの世界で、よく「準備が8割」と言われると思いますが、私は地域事業においても準備は重要であると思っています。

まず最初に、皆さんに5つの質問を投げかけたいと思います。

- ①：「あなたが取り組む地域循環共生圏のテーマはなんですか？」
- ②：「テーマを通じて解決したい、地域の課題はなんですか？」
- ③：「その問題によって一番痛みを感じている人は誰ですか？その痛みの大きさはどれくらいの大きさですか？」
- ④：「その痛みを解決するための事業や商品アイデアは明確ですか？」
- ⑤：「アイデアの実現は地域内リソースで可能か？足りない場合はどんなサポートが必要か？」

スラスラ回答できそうでしょうか？

この質問の何番目まで回答できるかで、皆さんの地域が地域循環共生圏づくりにおいて、今どのフェーズにあるのかが分かります。そして、このフェーズの見極めが地域でプロジェクトを進めるにあたって、とても大切になります。

## キレイなスローガンはあるが、「なぜ？」がない。地域にとっての「Why」づくりからスタートしたプロジェクト

杉山：ここからは、私たち根羽村の話をしたいと思います。

根羽村は、岐阜県と愛知県の県境、長野県の南西部最南端に位置しています。流域人口が110万人いる矢作川源流の村に約900人が暮らしています。面積の92%が森林で、村民全員が森林組合員です。「川の水は山から流れ、森を守らなければ水は守れない」という考えが大事にされてきました。

地域循環共生圏づくりがスタートした当初、すでに「流域連携」というテーマはありました。「流域は1つ」という考えに基づき、「流域の方々と交流して地域循環共生圏をつくろう」という、とてもキレイなテーマが掲げられていました。

ただ、「なぜ？」が明確ではなかった。

先ほどお伝えしたキレイなスローガンですが、それに対する地域住民の率直な気持ちは「自分たち村民がそもそも高齢化と人口減少で大変な状況なのに、なぜ流域連携をやる必要があるの？」でした。

当時、役場主導の流域連携プロジェクトはいくつかありましたが、ほぼ形骸化してしまっていました。根羽村役場の皆さんも大変で、職員数が減少する中で形骸化したプロジェクト含めて仕事として残っており、負担の大きさや、やりがいの少なさに繋がっていました。

森林組合にはキーマンがいて、その方が頑張っていて動いていたんですけど、役場との情報共有や連携に課題があった。

結果として、**各々が頑張っているが連動が少なく、成果が生まれていない状況**、が2年前の根羽村の状況でした。

**この状態を無視して新しいプロジェクトを立ち上げたとしても、「なぜ」がないとプロジェクトの持続性がないですね。**

そのため、まずは「**流域連携をなぜやるのか？**」「**どのような形でやれば根羽村の中の人にとってもメリットがあるのか？**」を、村民の方々とのワークショップを通じて固めていくことに注力しました。今振り返ると、これが重要なことでした。

地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業の活動団体に選定されるメリットとして、比較的柔軟に国の支援費を使えるというところがあります。私たちが取り組んだ「Why」づくりは、目に見えるアウトプットが出ないので、普通はなかなか行政の予算を使いづらいのですが、ファシリテーターやコンサルタントなどの外部の専門人材を巻き込むことに支援費を使ったのはありがたかったです。

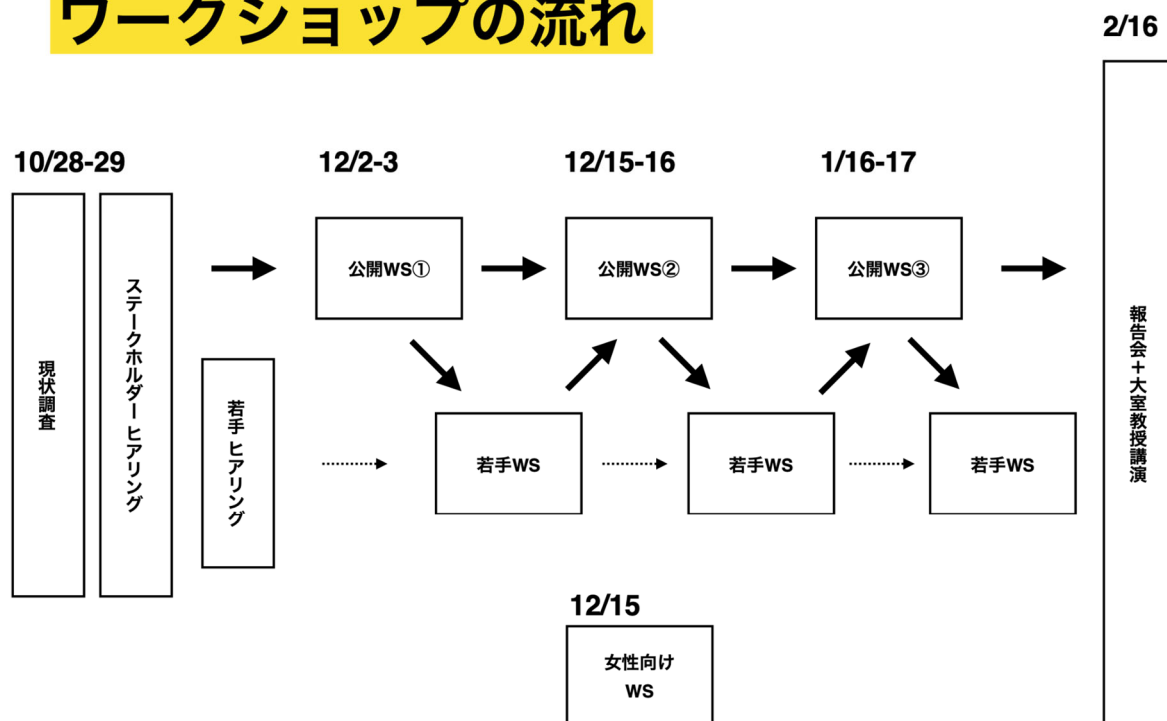
## **村中を巻き込み、目的と「Why」をつなげることに注力した1年目**

杉山：「30代~40代の村内在住者がこの地域で 今後も楽しく生き続けられる環境をつくる」そのために流域連携も位置づけられるのだということを、ワークショップを通じて感じたり、考えたりしてもらうことが、ワークショップの目的でした。

こちらが、私たちが行ったワークショップの全体像です。

10月にまず現状調査という形で村の皆さんや議員さんをはじめとするステークホルダーに2日間かけてヒアリングを行いました。

## ワークショップの流れ



根羽村 地域循環共生圏WS

根羽村にとって、村の若手が主役になっていくと考えることが大事だと考えていたので、「公開ワークショップ」に加えて「若手ワークショップ」を開催しています。

「公開ワークショップ」では村の重鎮含めた合意形成を中心に行っていたのですが、「若手ワークショップ」を平行して開催することで、若手の本音、「ぶっちゃけ」を拾い上げられるようにしました。

さらに追加で、「女性向けワークショップ」を開催しています。地域でワークショップをやると、どうしても男性陣主導になってしまう。また、男性に合わせると開催時間が夜になってしまいますが、そうするとお子さんがいるママさんは参加ができない。

そこで、休日の昼間を使って、「女性向けワークショップ」を開催することにしました。横に託児できるスペースを設け、そこでパパさんに子供をみてもらえるようにもしました。

ママワークショップは本当に面白かったです。地域の課題や暮らしの不満の溜まりどころは、ママさんが一番よく知っているんだと感じました。

こちらが、ワークショップで出た意見をベースに生まれた新しい取り組みのテーマです。

## 新しい取り組み

仕事と暮らしの  
コミュニティの場づくり

産業×観光（教育）の  
仕組みコーディネート

村の資源を活用した  
新規企画営業

人材コーディネート、  
活動資金獲得のサポート

根羽村 地域循環共生圏WS

また、ワークショップを通じてこれらのテーマが見えてきたときに、その取り組みを進めるための主体をどこにするのかも議論しました。

根羽村はこれまで村役場が企画～実行まで全部自分たちでやっていたのですが、役場と民間をつなぐ中間組織があった方が進めやすいということになり、一般社団法人ねばのもりが生まれることになりました。



ここまでが、初年度の取り組み内容です。

## 1年目があったからこそ、スピーディに「What」に繋げていくことができた2年目

杉山：初年度に「Purpose」と「Why」を紐付けることができたので、今度は「What」を具体的にしていくプロセスに入りました。

現在進行しているプロジェクトの一部をご紹介します。

### 現在進行中プロジェクトの一部



森林資源を活用した  
新しい商品づくり



ワークショップを通じて  
生まれた交流拠点の実現



役場の体制アップデートのための  
継続的役場研修



中間組織  
「一般社団法人ねばのもり」

一般社団法人ねばのもりでは、学校教育に地域連携の要素を追加していくための取り組みを行っています。「夏休みの放課後教室」や「放課後子ども教室」を開催し、森に親しんでもらっています。中学生の総合学習の授業として、ツリーデッキやジップラインを森の中につくるということをやってもらうなどしました。

また、森林資源を活用した新しい商品づくりにも取り組んでいます。徳島県上勝町の株式会社いんどりと連携して、木材から繊維をとってタオルをつくる事業を進めています。

商品づくりにあたっては、流域連携を進めています。布をタオルとして使える商品にする過程では、流域沿いのデザイナーさんや作家さんに委託をしています。

あとは、ママさんワークショップで出てきた「拠りどころがない」という課題に対して、交流拠点を立ち上げています。テレワークの予算を活用して、今月オープンしました。1階はシェアキッチン／託児所／コインランドリーがあり、2階はテレワークができるスペースになっています。村の交流だけではなく、流域沿いでテレワークをしたい人たちなど、流域の交流拠点になると良いと思っています。

また、役場の体制アップデートにも継続的に取り組んでいます。「役場の職員数が減っていて余裕がない」ということが新しいプロジェクトをやるにあたってネックになっているので、根羽村役場の業務改革を目指して研修を行っています。

ここまでスピーディにプロジェクトを進めることができたのは、1年目に広く意見を聞きながら「PurposeとWhyをつなげる」ことをやったからだと思っています。ここがあったからこそ、実行の際には合意形成のハードルが低くなり、スピーディに実行ができたと思っています。

**事業化に焦ってしまうこともあると思いますが、土台づくりとして地域の合意形成づくりに時間を割いていくことは、手段として全然アリなんじゃないかなと思っています。**

## 地域で目的と「Why」を合意形成することが大切なワケ

杉山：僕からの話しは以上です。

最後に、最初ともう1回同じ質問をさせていただきます。

- ①：「あなたが取り組む地域循環共生圏のテーマはなんですか？」
- ②：「テーマを通じて解決したい、地域の課題はなんですか？」
- ③：「その問題によって一番痛みを感じている人は誰ですか？その痛みの大きさはどれくらいの大きさですか？」
- ④：「その痛みを解決するための事業や商品アイデアは明確ですか？」
- ⑤：「アイデアの実現は地域内リソースで可能か？足りない場合はどんなサポートが必要か？」

どうでしょうか？

私たち根羽村は、取り組みスタート時はキレイなスローガンとして①はあったけれど、②と③、つまりが「Purpose」と「Why」の部分がしっかり見えていなかったのではないかなと思っています。

ですが、取り組みのスタート時にここをしっかり固めたことで実行の際はハードルが低くなり、今は④⑤まで到達することができています。

事業に取り組もうとすると、④からいきなり取り組みたくなることもあるかもしれません。ですが、この②③をしっかり捉えることが大事だということが、今日私からお伝えしたいことであり、タイトルの「準備が8割」という言葉にこめた思いでした。

ご静聴、ありがとうございました。

=====

「寺子屋ローカルSDGs」学び編では、こうした講義に加え、後半は質疑応答やカジュアルな意見交換の場を設け、より生々しいノウハウの共有を行っています。

「寺子屋ローカルSDGs」は、原則として、地域循環共生圏づくりプラットフォームの登録団体（地域・企業等）またはメールマガジン配信者向けのプログラムとなります。参加されたい場合、まずは地域・企業・個人いずれかでの各種登録をご検討ください。個人配信ならばすぐにご参加いただけます。

◆実践地域等登録制度：

[http://chiikijunkan.env.go.jp/tsunagaru/chiiki\\_touroku/](http://chiikijunkan.env.go.jp/tsunagaru/chiiki_touroku/)

◆企業等登録制度：

[http://chiikijunkan.env.go.jp/deau/kigyo\\_touroku/](http://chiikijunkan.env.go.jp/deau/kigyo_touroku/)

◆個別メールマガジン配信：

<http://chiikijunkan.env.go.jp/> ※トップページ下部の「メールマガジン」をご覧ください